

との隔絶の強調も、人間観の吐露に始まる世界説明というよりも、他者との隔絶を乗り越える為の道徳実践へと導くことを企図した主張として捉えられるのではなからうか。それが、或いは著者の言う朱子学的思惟方法の克服の先にある、仁斎の狙いなのではないかと愚考する次第である。

結

本書を通読すると、著者の問題意識と研究方法の展開の過程も窺われ、よき理解者の手で編まれたことが察せられる。稿本研究に生きた著者の業績は、著者自身の軌跡を示す構成となつて、改めて公刊されたのである。

著者は本学会の監事も務められ、評者の幹事在任中にも会計監査の労をおとり下さった。擱筆に当たって、改めてその冥福を祈りたい。

(早稲田大学非常勤講師)

板東洋介著

『徂徠学派から国学へ——表現する人間』

(ペリカン社、二〇一九年)

前田 勉

1

近年、思想家の顔が見えない思想史研究が多いなかで、本書は荻生徂徠と賀茂真淵という「畸人」の姿が浮かび上がってくる作品である。もちろん、思想史研究には様々な方法があつてよい。思想家個人の生と思想を切断し、言説空間において思想をみる方法もある。また、同時代の社会のなかで生きて悩む思想家の意識を内在的に理解する方法もある。そのなかで、いささか大勢に抗うかのように、本書は後者の内在的理解の方法によって、倫理学の立場から徂徠学と国学の賀茂真淵という近世思想史の二人の巨人を描いた意欲作である。

本書は「はじめに」で、唐突に椎名麟三の小説『美しい女』の一節を引用し、「本書が念頭に置く問題系」(七頁)を語り出す。著者はそこから「大仰な思想」を忌避し、日々の仕事の中で「物へじかに手をふれ、物を動かしたり変えたりすること」に拘泥する態度を読みとるのである。こうした経験的な「わ

「ざ」へのこだわりが、中国の科挙社会とは違う近世武家政権の特色であり、しかも、「西洋の衝撃」以前の日本思想史のほとんど掉尾に現れた彼らの思想言説の中で、この「物へじかに手をふれ、物を動かしたり変えたりすること」の哲学的・人間的射程は、はじめて原理的な追尋を受けていると見ることができる（一五頁）からだ、と大きな展望を示す。この「大仰な思想」と日々の「わざ」、「心」の教説と「型」が本書を貫くモチーフとなっている。以下、本書の叙述に沿って全体を紹介しよう。

2

第一章「経世論の外部」で徂徠学派を論ずる。題目から示唆されるように、本書の眼目は徂徠学の経世論自体ではなく、経世論から外に抜け出す契機が徂徠学派のなかにあることを示すことにある。

第一節「近世日本社会と職分論」では、従来の研究を踏まえ、朱子学の「理」が科挙社会に適合的であったこと、近世社会が職分国家であったことを指摘する。本書のユニークさはここから、「近世日本社会は、それぞれに固有の技術と興行きとをもった道々の束・集合体」（三〇頁）であったととらえ、徂徠学と国学をこの技術の「集合体」のうえに定置したことである。第二節「徂徠学の登場」では、飛驒の工匠のような技術の「集合体」としての近世社会が、「理」ではなく、「金銀」に浸

食されていくなかで、江戸生れ田舎育ちの「江戸の儒者」たる徂徠は、先王によって制作した士農工商のような「名」の体系が、人間社会の基本的な「型」だと考え、対応策を提示したとする。しかも、徂徠は職分の基底をなす技術もまた、聖人の発明だと考えていたと指摘する。その対応策こそが礼楽であった（第三節「礼楽と経済」）。徂徠が目指したのは、「金の要らない社会」（四五頁）であり、「市場原理に基づく現行の分配システムオルタナティブ」（五〇頁）として礼楽が期待されたと指摘したうえで、徂徠学における「人倫共同体の姿」とは、「為政者によって緻密に設計された礼楽制度が社会生活の隅々まで行き渡ること、あらゆる社会的交換の公平と適正とが達成され、そのもとで全成員がそれぞれの資質に応じた職業に従事」（五四頁）できるものだ、と敷衍する。

第四節「徂徠の経書観と人間観」では、徂徠の儒学体系が検討される。なかでも、著者は、徂徠学は「畢竟この「窮理」と「格物」との隔たりを起爆点として一挙に成立した」（五八頁）ととらえ、徂徠の「格物」観に焦点をあてる。それが芸道の「型」への習熟過程と発想を等しくするものというこれまでの指摘を踏まえ、さらに「格物」が「われわれ後代の日本人が解する意味」（六四頁）の「稽古」であると指摘する。そして、「[三]の外に確固とした形を備えてある技術の体系に身を置き入れ、その型を定めた道の元祖を信じ、また時に感謝し、その中の熟達に質朴ながらも充実した生の手ごたえを見出してゆく

という人生観が登場した。人生は内なる「理」を発現しゆく過程ではなく、不断の稽古である。それは決して新しい見方ではなかった。むしろそれは、職分社会たる近世日本の多くの人の実感を、儒学の語彙をもって表現したものだ(六八頁)と、技術の集合体たる職分社会に徂徠学を位置づけるのである。

第五節「超越と詩」では、徂徠の『易経』と『詩経』観を取り上げ、六経のなかに、この二つが含まれていることが、「行政区分や経済システムといった、堅い、領域とは異なる、人の内面的な信念や生きがいに関わる、柔らかい、領域にも抜け目なく周到な型が準備されていること」であり、「六経という統治技術体系の完全性の証左」(七五頁)であるとす。さらに、「理想の共同体においては、それらが個体としての人を共同体内の任意の一人としてのありようから抜け出させ、共同体の価値観から醒めさせてしまう前に、『易』と『詩』という巧みな仕掛けが、その人を群れの中に連れ戻す。析出しようとする外部を、共同体の内部へと回収し続けることが、この理想社会の秘密なのである」(八二頁)と指摘する。

第六節「治者の自己」では、「徂徠学派通有のエートス」(八四頁)である不遇意識を問題にする。著者は、「体系的な所謂「徂徠学」ではなく、生身の徂徠その人の自己了解や実存感覚を窺いうるテキスト」としての「偶作」(八四頁)や春台と南郭の詩の読解から、「即自的に充足した眼前の泰平の世から自分だけが余っている・はみ出しているというこの実存感

覚」(八六頁)を指摘し、こうした漢詩に表現される不遇意識は、徂徠学においては、「徂徠学が、六経から、ひいては儒教の基幹部分から、治者の自己の問題系を追放した」(九二頁)がゆえに、「存外に根の深い思想的事態」(九〇頁)だと指摘する。第七節「経世論の外部」では、徂徠学の孔子観を取り上げる。著者は、「論語集注」風の超然たる孔子ではなく、人間臭く未練な孔子を読み出そうとするのは、徂徠学派の『論語』の読み方の特色」(九八頁)だと論ずる。そして、「生きがいや詩や宗教に関わる、繊細の精神」の問題」「この治者の自己の問題が、徂徠学派の思想テキストにおいては、もてあまされたまままで投げ出されている」(一〇八頁)とする。

第八節「国儒論争の発端」では、春台の『弁道書』の刊行によって惹起された国儒論争を取り上げ、国学者たちが、「畢竟春台の挑発に乗り、春台の定めた土俵の上で雌雄を決」(一一七頁)しようとしたとして、徂徠学派と国学をつなげる。

3

第二章「賀茂真淵の思想」第二節「畸人」真淵」では、『近世畸人伝』中の真淵が、江戸の衆目を引いた「矯激な人物」(二三頁)だったことを取りあげ、真淵が社会との間に「ずれ」の意識を持っていたことを指摘する。その意識は、浜松の本陣に婿養子に入った真淵が、「近世武家社会(の従僕であること)にも、せわしない「銀の世の中」にも、馴染めない人」

(二二五―二二六頁)であったところから、さらには、恋愛結婚した最初の妻の死という切実な体験によるものだと指摘する。

ことに後者について、「岡部衛士(ないし岡部三四)が郷里を出奔し、江戸の風変わりな隠者・賀茂真淵となり、その後半生を送ったのは、一面では、出家の代わりに選ば取られた長い服喪の期間であった」(二二六頁)と指摘し、万葉の歌人柿本人麻呂の「挽歌」に「その照応物が見出された「我妹」の喪失に悲しみ嘆き「叫ぶ」自己と、悲しみの前に立ち止まることを許さない浮世の速い流れ」(二二七頁)との間のずれこそが、「隠士としての真淵」を決定づけたとされる。そして、こうしたズレの感覚を媒介に、「真淵は、政治信条上では真つ向から対立する徂徠・春台と、変革期に「遅れてきた」という実存感覚自体は共有している」(二三〇頁)と徂徠学と国学の共通の意識を見出している。感情移入を伴った内在的理解の方法による本書中の出色の一節である。

第二節「わりなきねがひ」では、『国歌八論』論争を取りあげ、真淵が「被治者の内的な情念を統御しようとしたとしても、個々の被治者の内面でそうした公共的な統制にいつまでも抵抗し続ける私的な核」としての「わりなきねがひ」(一三五頁)を説いていたことに注目する。朱子学的な「理」「徂徠学の「礼楽」」はともに、「治者はさまざまな意匠を動員して被治者の心の内に道徳的・公共的な均一性を作り出そう」とするが、「そうした企図はついに挫折するべく、人の内奥の情念は実に

さまざまである。この平凡というならば平凡な手応えが、真淵の思考の終生変らぬ出発点」であり、『国意考』の反一儒言説の基盤をなす論理が、『国歌八論』論争の中で、「歌という具体物に即して練り上げられてきたものだった」(一三八頁)と指摘する。ここに朱子学・徂徠学に対置する「真淵の思考の終生変らぬ出発点」を見出すのである。

第三節「直き」人々」では、真淵の鍵概念である「直し」が、儒学では否定的に捉えられていた「直情径行」の「和語による言い換え」(一四七頁)であったと指摘し、「真淵の「直し」とは、率直、さらにはいえばあけすけということ」(一四九頁)とする。第四節「更新された「雅び」」では、真淵の「雅び」が「一見「質朴」な文化の濫觴に見出される、確固たる論理と輪郭とを備えたシンプルな正しさ・まっとうさ」(一六二頁)であると解釈する。

第五節「五十音の秩序」では、真淵の自然・天地は、老荘の自然主義ではなく、日本語の五十音の体系を具体的なイメージとしてしているとし、五十音図観を取り上げる。真淵は五十音図を「音韻表ではなく、活用表と見た最初の人」(二六九頁)であると指摘し、彼の延約通略説(音通説)のなかに「日本語の超越的な秩序への信」(一七二頁)を見出し、さらに冠詞・序詞を論じて、「定型の「しらべ」を充足するための冠詞・序詞の意味内容が詠歌主体にとって意識されていない時にだけ「ゆたかにみやびたるしらべ」が現成するのであり、冠詞・序詞までも

詠歌主体の表現意識のもとに統御されてしまったとき、古典的な豊かさ・雅びやかさは喪われるのである」（一七九頁）と指摘する。

第六節「直き」もの、ふの道」では、『国意考』のなかで、歌の道のほかに「直し」と形容される「武の道」を検討する。

真淵の武が平田派の武とは異なることを指摘し、それが、徳川家康の旗下、三方原の武勲をあげた先祖につながる「中世的な「武」の伝統の上に自覚的に立っている」（一八六頁）とする。

その中世的な武とは、「不穏な私心をもったままで生きている」（一九三頁）武士である。この武の道の「直し」は、「わりなきねがひ」が巧まずに言葉に発せられるのが歌の道の「直」と重なるものだと言葉に指摘する。第七節「犬の群れと羊の群れ」では、『国意考』中で、「直き」「もの、ふ」たちの世界は「犬の群れ」に喩えられている」（一九五頁）ことに注目し、ここに真淵は「人倫の理想の達成された状態を表示」（一九五頁）していると指摘する。そのうえで、兵書『鈴録』の羊の群れに喩えられる徂徠の共同体観と対比し、「近世中期の国儒論争とは、羊の群れ」と「犬の群れ」との二つの秩序構想がぶつかり合った事態」（二〇五頁）だったとされる。

第八節「文と武と」では、真淵においては「一人の人における歌人と武人との重なりこそが、最も理想的に「直い」（二〇六頁）であり、歌と武が「被治者の私心の「直き」表出」（二〇九頁）だったと指摘する。「日本の思想史・文芸史上の花

形である歌人と武人との生の姿は、儒・仏の教えからはみ出しつつ、一種異様な存在感と迫力とを帯びたものとしてそこにあり続けた」（二〇頁）と指摘し、こうした歌と武への真淵の認識が、「日本の思想史に長く底流していた或る伝統が、徂徠学系の経世論という外からの刺激に触発されて、ひとつの自覚・反省へともたらされたものである」（二一〇頁）ととらえられる。そしてさらに、こうした思想をもちえたのは、真淵が、「この国で、聞いた風な道徳的な言辞を弄さず、もつと生々しく一人ひとりの生の陰翳に寄り添いながら、個々人を「足らし」続けてきた（と彼には実感された）その当体を、「直」さという言辞のもとにつかもうとした」（二一四頁）としたからだと言及される。

「結論と展望」では、「日本思想史の十八世紀を代表する徂徠学と国学とは、「心」の教説の否定と、その必然的な帰結としての「道」の外在化とによって、「心」に塗りつぶされた日本思想史中に聳立している」（二二八頁）と指摘し、心と型の立場から、「その核心部で決定的に岐れるとはいえず、もう一度俯瞰視点にかえれば、彼らの思考は日本の思想史上に蔓延した「心」の教説と鋭く対立する、「型」の思考とよぶことができよう」（二二九頁）と、徂徠学派と国学を日本思想史全体のなかに位置づけている。

本書の魅力である流麗華麗な文体の一端を示すために、引用が多くなってしまった。本書は倫理学の基本的な立場に立ちな

がら、社会史と思想史、文学・日本語史と思想史との間にあつた高い垣根を軽々と飛び越えてしまつてゐる。しかも、「経世論の外部」として「超越と詩」をとらえ、六経の儒学体系と徂徠学派の不遇意識をつなげることで、悩みもだえる個人の意識と思想体系を総体的に描き出した。このアクロバティックな連結は読みどころのひとつである。同様に真淵においても、「妻の死の前に佇立し、『万葉集』中の人麻呂挽歌に「身もふるはる、ばかり」の感動を覚える「江戸の市隠・賀茂真淵」が、日本の「古へ」の中に「直さ」を見出すことによつて、「一人の人の内面として統一を保」（二三二頁）つことができた指摘し、真淵の内面と「直し」という「真淵の思想的鍵語」（二三三頁）を結び付けている。著者持前の繊細な精神によつて、こうして徂徠学派と真淵の姿が浮かび上がってきた。本書は、新しい近世日本思想史の研究者が着実に育つてゐることを確信させる作品である。

（愛知教育大学特別教授）

曾根原理著

『徳川時代の異端的宗教 ——戸隠山別当乗因の挑戦と挫折』

（岩田書院・二〇一八年）

林 淳

著者は、徳川家康神格化という新分野を開いたバイオニアとして知られ、近世の思想史、宗教史の領域で幅広く活躍する研究者であることは、いまさら贅言を要しない。本書は、著者が長い間に書きためた戸隠山の勤修寺別当乗因についての論文を集めた論集である。乗因の著作の多くは、秘伝書、縁起、血脈系図、教学の書などで占められ、これらの難解なテキストを読み解くのは容易な作業ではないことは十分に想像される。天台真言の経論、中世の神道書、縁起、修験道章疏などの幅広い知識がなくては、テキストを的確に分析し、テキストから意味を汲み取ることは至難の業である。通常は、近世の思想家の群のなかで席をもたない乗因が、本書によつて陽の目を見て、彼の思想的な核心が解明されたことは、近世思想史の幅を広げることに貢献しよう。かつて近世思想史は、著作集のある儒学者や国学者が活躍する時代と考えられていた頃もあったが、そうした考え方はもう終わったようである。思想史学は隣接分野に越境し、越境することによつて変貌と相互交渉を重ねていき、現